

科目難易度を考慮した GPA に関する研究方式の比較評価

Evaluation of Modified GPA to Reflect Course Difficulty

稲垣麻央[†]
Mao Inagaki

能上慎也[‡]
Shinya Nogami

1. はじめに

現在、多くの大学で導入されている学生の成績評価方法として GPA (Grade Point Average) が挙げられ、様々な角度から研究がなされている ([1][2]) .

本稿では、学生の成績評価方法として導入されている GPA について、より正確な評価のために各履修科目の難易度を考慮に入れた新たな GPA 方式をいくつか提案し、比較評価を行う。その評価の際に用いるポイントをパラメータとして様々な値に変化させ、それぞれの方式の適用領域を明らかにする。

2. 問題提起

現在の GPA は各学生の履修科目が異なるため、同学部の学生同士であっても、難易度が高く、単位修得の難しい科目を多く履修している学生と、難易度が低く、単位修得が易しい科目を多く履修している学生とでは、GPA の数値が同じであっても、評価というポイントにおいては厳密には正確性を欠く。また、他学部や他大学との学生同士の GPA の比較は同様の理由で無意味である。

学生の成績をより正確にかつ広範囲で比較できるようにするため、以下の手順で研究を進める。

①同一学部内で学生の成績を比較できるようにする。

②他大学の学生の成績と比較できるようにする。

→①で求めた学生が履修した科目の難易度を含めた GPA に大学の偏差値 (分布を考慮したもの) を組み込む。

本稿では、①で提案する方式の比較を行い、それぞれの適用領域を明確にする。

3. GPA について

一般に GPA は(1)式により計算される。各科目につけられた成績のレターグレード (例えば、S/A/B/C/D) をグレードポイント (GP) と呼ぶ数値 (例えば、4.0/3.0/2.0/1.0/0.0) に対応変換し、その学生の履修した各科目の GP に当該科目の単位数を乗じて、その総和を履修総単位数で除する。

$$GPA = \sum(GP * \text{単位数}) / \sum \text{単位数} \dots (1)$$

4. 各種方式 (文献[3])

科目の難易度を考慮した GPA 方式として、以下の方式 I ~ IV が挙げられる。

ここでは、現行 GPA を GPA と表示し、難易度を考慮した GPA を GPA* と表示する。方式 I ~ IV はそれぞれ【I】GPA*₁、【II】GPA*₂、【III】GPA*₃、【IV】GPA*₄ と表す。

方式 I、II は、RGP、SGP を定義することで、科目難易度を考慮した GPA*₁、GPA*₂ を算出している。

方式 III、IV では、GP、GPA はもとの定義を用いて、これらに新たに定義した難易度 D₃、D₄ を重みづけすることで難易度を考慮した GPA*₃、GPA*₄ を算出している。

[†] 東京理科大学大学院経営学研究科 Graduate School of Management, Tokyo University of Science

[‡] 東京理科大学経営学部 School of Management, Tokyo University of Science

【I】RPGA (relative GPA) : 各科目の素点に相対評価基準 RE5 を適用し、各成績段階の (最大値+最小値) /40 という変換式を用いて RGP を求める。それに基づき GPA*₁ を算出する。

表1 方式【I】

GPA			GPA* ₁	
素点	LG	GP	RE5	RGP
90-100点	S	4.0	90-100% (上位10%)	4.75
80-89点	A	3.0	65-89% (次の25%)	3.85
70-79点	B	2.0	36-64% (次の30%)	2.5
60-69点	C	1.0	11-35% (次の25%)	1.15
0-59点	D	0.0	0-10% (下位の10%)	0.25

【II】SGPA (standard score GPA) : 素点から偏差値 (SS) ((2)式) に変換し、SS/20 という変換式を用いて SGP を求める。それに基づき GPA*₂ を算出する。

$$\text{偏差値 (SS)} = 50 + \{10(\text{得点} - \mu) / \sigma\} \dots (2)$$

(μ : 平均点, σ : 標準偏差)

【III】GPA*₃ (0.2 ≤ D₃ ≤ 2.0) : D 評価 (59 点以下) の人数が全体に占める割合で難易度 (D₃) を算出し、現行 GPA に重みづけを行い、GPA*₃ を算出する。

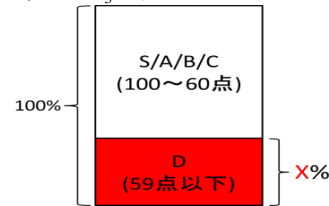


図1 方式【III】

科目履修者の成績を 100% とし、その中で D 評価 (59 点以下) の人数が全体に占める割合を X% と定義する。さらに X% を(3)式に代入し、難易度 (D₃) を求める。

$$\text{難易度 (D}_3\text{)} = \min\{0.2 + 0.05X, 2.0\} \dots (3)$$

この難易度 (D₃) を用いて(4)式より、GPA*₃ を算出する。

$$GPA^*_3 = \sum(GP * \text{単位数} * D_3) / \sum \text{単位数} \dots (4)$$

【IV】GPA*₄ (0.005 ≤ D₄ ≤ 2.0) : 各レターグレードの人数が全体に占める割合 (r₁/r₂/r₃/r₄/r₅) を求め、その値に GP を乗じ、PGP (Point of Grade Point) を算出し、合計値 (ΣPGP) から(5)式より難易度 (D₄) を算出する。

表2 方式【IV】

LG	S	A	B	C	D
GP	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0
割合(%)	r ₁	r ₂	r ₃	r ₄	r ₅
PGP	4r ₁	3r ₂	2r ₃	r ₄	0

$$\Sigma PGP = 4.0 * r_1 + 3.0 * r_2 + 2.0 * r_3 + 1.0 * r_4 + 0.0 * r_5$$

$$\text{難易度 (D}_4\text{)} = 2.005 - \{\Sigma PGP / 200\} \dots (5)$$

この難易度 (D₄) を用いて(6)式より、GPA*₄ を算出する。

$$GPA^*_4 = \sum(GP * \text{単位数} * D_4) / \sum \text{単位数} \dots (6)$$

5. シミュレーション方法

科目難易度を考慮した GPA* の方式 I ~ IV を学生の試験得点のダミーデータを用いてシミュレーションを行い、比較する。

5.1 ダミーデータ

シミュレーションで用いるダミーデータは、学生数を45名とし、一人一人の履修科目を全40科目中20科目とする。

【 S_{mn} の15パターン】

- ・平均点 $m=1\sim 5$ (50/60/70/80/90)
- ・標準偏差 $n=1\sim 3$ (0~10/11~20/21~30)

5.2 評価方法について

ダミーデータの中で、難易度の低い易しい科目ばかりを選択した学生群(α)、難易度の高い難しい科目ばかりを選択した学生群(β)、難易度の低い科目や高い科目をバラバラに選択した学生群(γ)の3つのグループに分割する。

グループごとに方式I~IVのGPA*を求め、現行GPAとの差を求める。さらに、その中から最適な方式を導く。

ここでは、PointをPとQ、WidthをWと定義する。PとQは与える得点の変数であり、Wは幅の変数とする。

(α) $GPA^* - GPA < 0 \rightarrow P$, $GPA^* - GPA \geq 0 \rightarrow Q$

(β) $GPA^* - GPA > 0 \rightarrow P$, $GPA^* - GPA \leq 0 \rightarrow Q$

(γ) $|GPA^* - GPA| \leq W \rightarrow P$, $|GPA^* - GPA| > W \rightarrow Q$

本稿では、(α) (β) (γ)で用いられるPとQの値を変化させ、また、(γ)で用いられるWの値を変化させる。ポイントの値をパラメータとして様々な値に変化させた際に、それぞれの方式の適用領域を明らかにする。

6. シミュレーション結果

最終的な結果に関しては、発表時に示す。

6.1 方式間の比較

○文献[3]における比較結果 (P=1, Q=-1, W=0.5)

(α) $GPA^* - GPA < 0 \rightarrow 1$, $GPA^* - GPA \geq 0 \rightarrow -1$

(β) $GPA^* - GPA > 0 \rightarrow 1$, $GPA^* - GPA \leq 0 \rightarrow -1$

(γ) $|GPA^* - GPA| \leq 0.5 \rightarrow 1$, $|GPA^* - GPA| > 0.5 \rightarrow -1$

表3 文献[3]における比較結果

方式	α	γ	β	合計値
方式III	45	31	45	121
方式IV	45	-35	45	55

この場合では、方式IIIが方式IVより優れた結果となった。

○今回の比較結果 (P=1, Q=-1, W=1.2)

(α) $GPA^* - GPA < 0 \rightarrow 1$, $GPA^* - GPA \geq 0 \rightarrow -1$

(β) $GPA^* - GPA > 0 \rightarrow 1$, $GPA^* - GPA \leq 0 \rightarrow -1$

(γ) $|GPA^* - GPA| \leq 1.2 \rightarrow 1$, $|GPA^* - GPA| > 1.2 \rightarrow -1$

表4 今回の比較結果

方式	α	γ	β	合計値
方式III	45	45	45	135
方式IV	45	45	45	135

(γ)で $W \geq 1.2$ の場合では、方式IIIとIVに差はなくなる。

6.2 方式IIIとIVの適用領域

6.1 からWの値によって方式IIIまたは方式III、IVが良いという結果となったが、平均がほぼ同値の場合でも、方式IIIとIVで難易度に差が出る場合があるかどうかを以下の2つの例で調べた。

○D評価の割合が同じ場合

図2の科目①、②(平均とD評価の人数はほぼ同じで分布が異なる)に対して方式III、IVの難易度は、表5のようになった。方式IIIでは両方の科目の難易度が同じと出ているが、両方とも易しくかつ②の方がより易しいと評価する方式IVの方が妥当のように思われる。

表5 科目①、②に対する方式III、IVの難易度

	科目① (81点)	科目② (84点)
方式III	1.00	1.00
方式IV	0.600	0.420

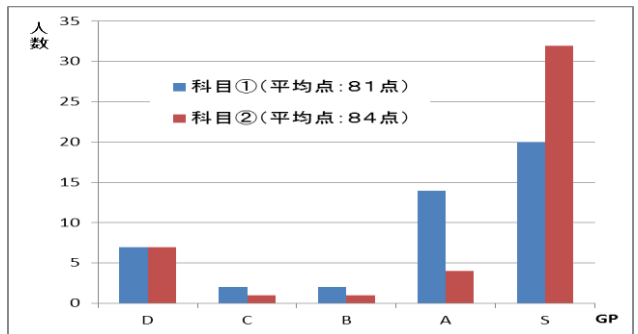


図2 科目①、②の分布

○D評価の割合が異なる場合

図3の科目③、④(平均はほぼ同じだが、D評価の人数が異なる)に対して方式III、IVの難易度は、表6のようになった。方式IIIでは差が出るが、方式IVでは大きな差は出ず、ここでは、方式IVのように科目③と④の難易度はほぼ同じと評価するのが妥当のように思われる。

表6 科目③、④に対する方式III、IVの難易度

	科目③ (71点)	科目④ (70点)
方式III	1.30	2.00
方式IV	1.145	1.135

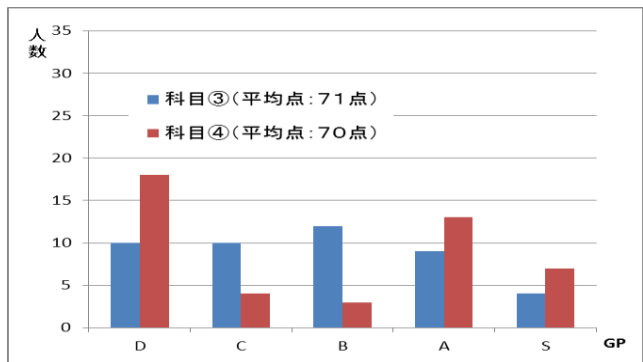


図3 科目③、④の分布

7. むすび

本稿では、全く異なる科目を履修した学生の成績を比較するため、現在のGPAに科目の難易度を組み込んだ方式を提案、比較し、評価した。

6.1の結果は、難易度が高いものはより難しく表示され、難易度の低いものはより易しく評価されて、上記のような結果となったが、今回の6.2の結果では分布全体を考慮すると、方式IVの方が科目難易度を考慮したGPA方式として適切であることが分かった。

今後は、他大学の学生との成績比較ができるような大学偏差値の提案が課題となる。

【参考文献】

- [1] 半田智久, “GPA制度の研究 functional GPAに向けて”, 大学教育出版, (2012年1月30日).
- [2] 林直嗣, “大学教育のガバナンスと成績評価基準(上)(中)(下)= 質保障とGPA制度=”, 法政大学経営学会, 『経営志林』第47巻第1号, (2010年4月).
- [3] 稲垣麻央, 能上慎也, “科目難易度を考慮したGPAについて”, 電子情報通信学会総合大会, D-17-2(2013年3月).